

第04号 | 2013年1月23日発行

## 私に保育を教えてくれたこどもたち

教授 清水玲子

私に「もっとこどものことを知りたい、わかりたい、学びたい」という思いを与えてくれたのは、学生の頃に出会った自閉的傾向のあるMちゃんとの出会いでした。それから保育の研究と教育の道へと進み、かれこれ40年ほどの時間が経過しました。



現場の先生がたと共に研究会で学ぶ中で、こどもに誠実に向き合う、すばらしい保育士の先生がたに私は出会うことができました。

Bちゃんは、保育士の先生に注意されたある日「ぼくなんていないほうがいいんだ!」と言いました。よく話を聞いてみると、Bちゃんは両親の多忙さから祖母宅に預けられたりしており、大きな寂しさを抱えていることがわかりました。

保護者の事情でクリスマス会にも参加できない見通しとなり、みんなで披露する劇にも「ぼくは関係ない」と参加しようとしないうるBちゃんのため、保育所の先生がたは議論を重ね、Bちゃんが参加可能な12月26日にクリスマス会を延期することを決めたのです。

こどもたちには「サンタさんは怪我をしたので、この保育園に来るのは遅れるよ」と伝え、実際に松葉杖をついて現われたサンタと共に、Bちゃんはクリスマス会を楽しむことができました(著書『育つ風景』(かもがわ出版、2004年)所収のエピソード)。

こどもはほんとうに精いっぱい生きています。そんなこどもにとっても近い場所で、その「精いっぱい」に応えようとがんばっているのが保育所の先生やこどもにかかわる仕事をしている人たちです。この仕事の重みは大きく、本当にたいへんだと思います。しかし、ここからしか得られない充実感や幸せも大きいと思います。

こどもをほんとうに大切にするという理想に辿り着くためには、現実のさまざまな困難に私たちは常に直面し、悩むことになるかもしれません。しかし、この「悩み」や「課題



意識」を持つことこそが、とても貴重なことだと思います。「こどもをほんとうに大切にす道」を、私はこれからもみなさんと一緒に探し続けて行きたいと思っています。

(文責：鈴木崇之)

2013年1月22日、清水玲子先生の最終講義が実施されました。会場には250名の聴衆が集まりました。清水先生、長い間ありがとうございました。子ども支援学専攻教員・学生・OBOG一同